

長生特別支援学校の防災教育

県立長生特別支援学校主幹教諭 はにや 埴谷 ていじ 貞二



1 本校の立地

海と緑に囲まれた自然豊かなすばらしい立地環境である。一方で、海から400m、海拔5mという立地は、津波からの避難課題を開校以来抱え続けている。特に、平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波災害の衝撃は、改めて本校の立地リスクをクローズアップした。

2 防災計画の見直し

平成24～25年度、県教育委員会指定の「命の大切さを考える防災教育公開事業」に取り組んだ。東日本大震災の教訓に学び、避難計画を抜本的に改めた。近くに高台がない本校は、遠方の高台に避難するために、スクールバスや職員の自家用車に分乗して避難する計画を作成した。海拔50mの一の宮カントリー倶楽部の協力を得て、スクールバスでの避難訓練を重ねた。また、遠方の高台を目指すだけでなく、より短時間で最寄りの一番高い場所を目指す避難計画も模索した。当時、本校で一番高い場所は海拔8.6mの2階であった。近隣の船橋市立一宮少年自然の家の協力を得て、海拔10mの3階まで徒歩で避難する訓練も行った。車椅子利用児童生徒の姿勢保持を保障した車椅子ごとの昇降には困難を極めた。車椅子利用児童の避難の在り方が課題になった。平成25年3月に海拔11.2mの屋上に避難するための非常用外階段が設置された。以降は、車両による校外避難と屋上への避難の二本立てで訓練を重ねている。

3 継続される防災教育

「命の大切さを考える防災教育公開事業」を契機に、これまで実践してきた防災教育を整理して改めて教育課程に組み込んだ。小学部は、身の安全を守る一次避難の動きをリトミックで学んだ。中学部は、職業・家庭で防災リュックを作り、総合的な学習の時間で地震や津波について調べた。調べたことをカルタにまとめ、繰り返し楽しみながら避難の基本を覚えた。高等部は、総合的な学習（探究）の時間で、段ボールやポリ袋を活用した簡易防災グッズ作りを行った。また、校内の非常口や消火器の位置を配置図にまとめて掲示した。これらの学習は、継続されていった。

4 マンネリの打破～「ラップ」防災～

しかし、画期的だったはずの校外への車両避難や屋上への避難は、いつしか訓練のための訓練になっていった。また、各学部に関心がオリパラ教育へと向くにつれて、防災教育は次第に前年度の計画をただ踏襲するだけとなった。そんな折の平成30年度、もっと身近な題材で防災に迫ってみようと、小学部4年生の二人組が、天気と温度から熱中症で気を付けることや、自分の心の天気についても自覚して、雨（泣きたいとき）や雷（怒りが大爆発しそうなとき）の場合の対処方法などを学び始めた。学習内容は、簡単な歌詞にして歌った。繰り返し歌うことで、学習内容が定着した。歌が好きな二人からは、もっと学習したいという学びに向かう姿勢が顕著に表れた。防災訓練の事前事後学習としても活用さ

れるなど、マンネリ化していた防災教育のカンフル剤となった。楽しく歌って学ぶその取組は、「ラップ♪防災」と名付けられた。子供の学習の様子を紹介して、防災についての情報発信を考えた保護者と学校の思いが重なり、YouTube長生特別支援学校チャンネルを開設して動画投稿を行った。反響は大きかった。二人は校内でスターになった。とはいえ、本人たちはこれまでどおりの自然体で学習を続けた。二人のユニット名「なちゅりー」が「ありのまま」「自然体」の意味から由来しているそのままを体現していた。二人の動画は、他のクラスの授業導入で活用されるようになり、本校の防災教育は、再び活気付いた。修学旅行でも防災教育が取り入れられた。平成30年度の中学部は「そなエリア東京」を見学して防災体験学習を行った。令和元年度の高等部は見学先の名所だけでなく、災害発生時の避難方法についても事前に調べて発表し合い旅行に臨んだ。また、高等部1年生と2年生は、地域の避難場所を見学し、本当に避難できる場所なのかを体験する学習を始めた。

5 地域との連携

本校の取組は、ほうさい甲子園において、平成30年度と令和元年度に「津波ほうさい賞」、「withコロナ」がテーマに加わった令和2年度は「優秀賞」を受賞した。



「コロナにめそめそするならば、ぼくらはコロナで学んじゃおう」と歌う「ラップ♪防災」

に象徴されるように、感染症を恐れるだけでなく、どうしたら安心安全に学習できるのかを教職員と児童生徒が考えて、感染症対策を学び、その上で可能な限りの学習活動を展開した。リモートによる授業や集会を試行錯誤して実施した。修学旅行は、方面と交通手段を何度も検討して、泊を伴う行程を実現した。文化祭は、一般客の来校を抑えて保護者のみの入場制限で実施した。そんな状況に、行政や福祉関係機関を含めた地域の方々から、本校児童生徒に向けた応援メッセージを、木の葉を型取った台紙に書いてもらった。PTA役員がそれらを回収して、大型掲示物「長生特別支援学校～絆の木～」を制作した。その大作が文化祭で披露されると、子供も大人も、勇気をもらうとともに、地域の絆を実感した。

防災教育の推進と発展には、地域との連携は不可欠である。令和2年度の1000か所ミニ集会は、「地域で取り組む防災教育」をテーマに本校の防災教育の現状を報告した上で、「もし10m級の津波に襲われたら地域や学校はどうするか」という問題について、地域の消防、防災行政担当と福祉関係者を招き、保護者代表も加わり、パネルディスカッションを行った。災害時の避難支援や合同避難訓練が話題に上がった。避難の在り方や訓練の在り方についても厳しい指摘をもらった。移転についての話題は何度も上がった。講師の千葉科学大学危機管理学部教授の藤本一雄先生からは、年度始めから本校の避難計画についての指導助言を仰いだ。本校だけの試行錯誤で行き詰まっていた防災教育と避難計画に、一筋の光が差した。

今後も、安心安全な防災教育を、地域と連携して推進していきたい。また、地域に頼るだけでなく、地域のセンター校としての防災教育の役割も模索して果たしていきたい。